

〔ライブラリー〕

心の病と社会復帰

蜂 矢 英 彦 岩波書店、1993

筆者の蜂矢英彦氏は、長年臨床の第一線で、精神障害者のリハビリテーションに携わってこられた精神科医であり、日本の精神科領域が抱えるさまざまな問題に対して、実践にもとづく貴重な提言をおこなってきたことで知られている。特に、1981年に発表された「精神障害論試論—精神科リハビリテーションの現場からの一提言—」（臨床精神医学10, 1653-1661.）では、それまでの精神科領域の視点に“障害”の概念を積極的に取り入れる必要性とその有用性について主張している。その主張に対して、臺弘氏は1985年に発表した論文「慢性分裂病と障害概念」（臨床精神医学, 14(5), 737-742.）で、『筆者は、言いにくいことをよく言ってくれたものだと感心して…（中略）…彼の主張に賛同した。』と述べている。この提言以降、精神科リハビリテーション関連の論文に、1981年の論文が必ずといってよほど文献の一つとしてあげられていることをみれば、その意味の大きさが理解できる。

本書は、そのような仕事をしてきた著者が、心病む人たちのリハビリテーションの実情とその問題点を、専門外の人々に理解してもらう目的で書いたものである。本書全体を通して用いられている表現は、可能な限り身近な言葉で分かりやすくという著者の配慮が伝わってくる。全体の構成は、第1章：心の病は誰にでもおこる、第2章：さまざまな心の病、第3章：心の病はどこまで治るか、第4章：精神病院における活動、第5章：社会復帰の専門施設、第6章：心の病と犯罪事件、第7章：18年ぶりの精神病院で、第8章：地域社会で生きる、の8つの章からなっている。どの章も、精神科領域の統計資料や主治医として実際に担当した事例を紹介しながら具体的に書かれていて読みやすい。確かに、一般の読者に分かりやすく伝えたいという著者の意図と新書版という性格によって、この領域に携わっている読者であれば、もう少し踏み込んだ表現をして欲しいと思う部分もある。しかし、読みやすさの背後には日本の精神科リハビリテーションの問題点が随所に見られ、その点を見出し焦点化していく役割は読者に委ねられていると思う。特に、第6章から8章を読むと、心の病と社会との関係性、障害を持ち

ながら社会生活をおくっていくことの意味、本人や家族にとって本当に必要なこと、などこれからも引き続き考えていかなければならない本質的な課題が見えてくる。その意味で、本書は、初めて心の病に関する本を手にした者から臨床現場に従事している者まで広い範囲の読者に向けられたものであり、それぞれの立場で理解の度合を深めることのできる書であると思う。

本書が出版されてから約3年という月日が流れた。その間、精神科リハビリテーションに関連する法制度に大きな動きがあった。1993年12月には心身障害者対策基本法が「障害者基本法」に改正され、法対象の一つに精神障害者が明記された。1994年6月には「地域保健法」が成立し、市町村レベルで精神障害者の社会復帰施策を構ずる方向が示された。そして、1995年5月には精神保健法が「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」に改正され、福祉が法文言の前面に位置づけられることとなった。他の障害領域からすれば遅々とした歩みではあるが、少しずつ精神障害者への対応が整いつつある。ただし、その一方では相変わらず越えなければならない壁ばかりで、本当に本人や家族を支えることができているのかと暗い気持ちになってしまうことも多い。その点については筆者自身も、本書のあとがきに次のような一文を載せており、どのような態度で処していくべきか示唆してくれているので紹介する。「正直なところ、精神科の医療も福祉的なサービスも、あるべき姿からは程遠く、のんきに構えてはいられない。その現実を前に、ベシミストになってしまった者もいるし、いつも憤激してばかりいる者もいる。私も、容赦なく予算要求を削ってくる大蔵官僚など、顔の見えない相手には怒りを覚えるし、空しくなるときも、たまにはある。しかし、顔を合わせて議論してきた国や都の精神保健行政担当者からは、それぞれの立場で努力している姿を感じたし、初対面のときに自ら握手を求めてこられた板橋区長の掌は温かかった。ベシミズムや憤りだけでは現場の仕事は進まない。」

(国際医療福祉大学作業療法学科 荻原喜茂)